九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

パーラメンタリー・ディベート ： 形式的特徴と教育的意義

中野, 美香
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494609

出版情報：比較社会文化研究. 17, pp.25-31, 2005-03-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化研究』第17号（2005）25～31
Social and Cultural Studies
No. 17 (2005), pp. 25～31

パーラメンタリー・ディベート—形式的特徴と教育的意義—

Parliamentary Debate: Its formal features and educational values.

中野美香（ナカノミカ）

0．はじめに

ディベートの歴史は古く古代ギリシャ・ローマ時代に端を発すると言われているが、国家間のボーダレス化が進む現代社会においては、複雑化する問題への平和的解決・交渉法として、あるいは国際舞台で活躍する人材育成を目的として、その存在意義はここ数年でさらなる注目を集めている。本稿は、教育を目的とするディベート形式の一つであるパーラメンタリー・ディベート（PD）に焦点を当て、パーラメンタリー・ディベートの形式的特徴と教育的意義について考察を行うことを目的とする。本論でこのテーマに焦点を当てる主な理由は二点ある。

一点目は、PDに関する研究が少ないことである。コミュニケーション研究が古くから発展してきたアメリカでは様々なディベート形式が存在するが、その中でも伝統的に行われているものにチーム・ディベートとリンカーン・ダグラス・ディベートがある。チーム・ディベートは二人一組の2チームで行われ、後援ディベート団体(アメリカ議論学会の全国ディベートトーナメント（NDT）と反対尋問ディベート協会（CEDA)）によって異なる形式が使われる（Ziegelmueller & Kay, 1997)。アメリカではこれらの形式が長い間主流だったため、PDは近年まであまり注目されてこなかった。日本においてもPDが導入されたのは1990年と歴史が浅いため、日本国内の学術研究は発表されていない（中野2005a)。

二点目は、PD研究の必要性として、PDには現在まで中心的に研究が行われてきたディベート形式と特徴を異にする点が多いことが挙げられる。現在PDは世界最大規模で活動が行われており、その学習者は増加の一途を遂げている[1]。この普及の要因として、近年のディベートに対する関心の高まりに加えて、PDの特徴である聴衆とのコミュニケーションに重点を置いた独特の形式が、国際化に伴う英語コミュニケーション能力のニーズと一致したことが中野（2005b)の研究結果より示唆された。英語教育やコミュニケーション教育の在り方が問われる中で、特徴的にこれらの要素を内包するPDは研究の対象として注目に値するものと考えられる。

以上を踏まえて、本論では他のディベート形式との比較を行いながらPDの形式的な特徴を明らかにし、PDがどのような独特な教育的意義をもつかについて考察を行う。

1．理論的背景

元々ディベートはスピーチ・コミュニケーションの分野で研究が行われていたが、近年の「ディベート」の言葉の普及に伴って、日本国内でも様々な文脈でディベートの意義が論じられるようになった。特に教育現場へのディベートの導入を検討する動きは著しく、ディベートを教育の手段として用いる教科教育の例を挙げると、英語教育でのオーラル・コミュニケーションや法教育などの社会科教育、理科教育、言語技術教育としての国語教育などがある。最近では総合教育にディベートを取り入れる試みなどもあり、以前は英語による大学生の課外活動が中心であったディベートも現在では言語を問わず高等学校から小学校などで実践が行われるなど、ディベート教育やディベート研究に対するニーズもますます高まっている。

これに対してPDは、日本ではほとんど注目されることはなかった。研究レベルの分析は加えていないが、1983年にミルワード（1983）が初めてイギリスのディベート形式を紹介している。1984年にはInoue（1984）がイギリスのディベート大会についての研究を発表しているが、その当時もInoueが以下に述べているように、PDあるいはイギリスのディベートに関する活動のみならず、研究も長い間日本では不在の状態であったことがうかがえる。

> We can even read a transcript of the American National Debate Tournament with extensive Japanese notes. But British debating is hardly

1　Colm Flynn(n.d.)によると、毎年12月末から1月の初めにかけて開催される世界大会(World University Debating Championship)には現在（2003年）まで約50カ国／地域が参加しており、参加者は年々増加傾向にある。このような世界規模のディベート大会は他に例がない。

noticed in Japan currently although many American textbooks do give some accounts of it. (p. 31)

その後、1995年に国際基督教大学のICU Debating Societyが実践的なマニュアル本である*Essence of Parliamentary Debate*の初版を発表する（ICU Debating Society, 1999)。しかし、それ以降も中野（2005a、2005b）の他はPDに関する研究は発表されていない。

一方、アメリカでは現在まで多くのディベート研究が行われてきた。ディベート研究の対象は議論学から説得方法まで多様であるが、日本と同様にPDに関する学術研究の数は少なく、PDが研究分野で注目を浴びるようになったのは1990年代に入ってからのことである。その契機となったのはSheckels & Warfield（1990）が1990年に議論学・討論学分野で最も権威があるとされる*Journal of American Forensic Association*に発表した、PDの教育的価値に関する論文だろう。この論文には、「1970年からディベートはスピーチ・コミュニケーションの学問の中で中心となってきたが、PDはこの学問という文脈の外で活動が行われている。学生を中心に活動が行われているPDはスピーチ・コミュニケーション学者の注目を免れてきた」(p. 86, 中野訳)と書かれている。この記述から、当時、PDの世界的な普及とともにアメリカでもPDの活動が行われるようになり、その影響でスピーチ・コミュニケーションの研究分野でもPDに焦点が当てられるようになったことがわかる。同年には、大学教員を中心にPDの活動を運営する全国パーラメンタリー・ディベート協会（National Parliamentary Debate Association: NPDA）が設立され、PDに関する研究をまとめる学術雑誌*Parliamentary Debate*が創刊されている。

これまでのPDに関する研究の主なものには、PDにおける議論をまとめたWilliams (1993) やリサーチ方法に関するSusan (1996) などの研究がある。1998年にGalizio & Knapp (1998) がPDのマニュアルをアメリカで初めて出版してからは(Tindell, 1998, p.187)、Meany & Schuster（2002, 2003）によるPDの実践に関する文献も発表されている。上記の研究はアメリカにおける英語母語話者を対象としたディベート研究であるが、これらが主にPDの特徴であり、伝統的なNDT形式と最も特徴を異にするコミュニケーション性や即興性、またあらゆるトピックを扱う論題の多様性について必ず言及していることから、PDのコミュニケーションにより重点を置く形式が、英語母語話者、つまり母国語でPDを行う場合でも教育的価値として認められていることがわかる。

2．形式的特徴と活動の特質

ディベートには様々な種類がある。使用言語を例にとると母国語と外国語では練習方法が違うように、どのディベート形式を用いるかによってその活動形態は大きく異なってくる。このように、あるディベート形式に関する活動を一つの構造として捉えると、構造の枠組みの核はディベートのルールや大会形式であり、関係するあらゆる活動を含ませるこの構造という概念は、活動全体の包括的な理解に役立つため、あるディベート形式を明らかにするためには有益であると考えられる。そこで第2章では、PDの構造的枠組みとして形式的特徴や活動に焦点をあて、特徴を異にする点の多いNDT形式との比較を用いながら相違点を明らかにする。第3章では、第2章で明らかにしたPDの特質によってどのようなPD固有の教育的価値が得られるか、考察を行う。

Meany & Shuster (2003) は、「PDの最も大きな特徴はディベートやディベーターの創造性を制約するような公式ルールがほとんどないこと」(p. 36, 中野訳）と述べているように、PDの形式はシンプルで学びやすく、初心者でもすぐに行うことができる。その中でもPDの特徴として、(1) 形式、(2) 論題、(3) ポイント・オブ・インフォーメーション（Point of Information: POI)、(4) 議論、の四点について説明を行った後で、NDTとPDの二つの形式の主な相違点をまとめる。

一点目の特徴は、PDの独特の形式である。現在世界で“Parliamentary Debate”の名の元で活動が行われているものには、主に北米形式、英国／ワールド形式、オーストラリア・アジア形式の三種類がある[2]。日本では1990年に導入された形式が北米形式だったため、国内の活動では北米形式（表1）が最も多く用いられているが、世界大会では英国スタイルが、アジア大会やオーストラリア・アジア大会ではオーストラリア・アジア形式が使われており、大会参加や練習のために異なる形式を用いるクラブも少なくない。これらの形式はチームやディベーターの数、スピーチの数、スピーチの時間制限が異なるものの、基本的なルールは同じである。本論では主に北米形式の特徴について述べる。

2　英国／ワールド形式、オーストラリア・アジア形式については附録1参照。

表 1　PD の形式：北米スタイル[3]

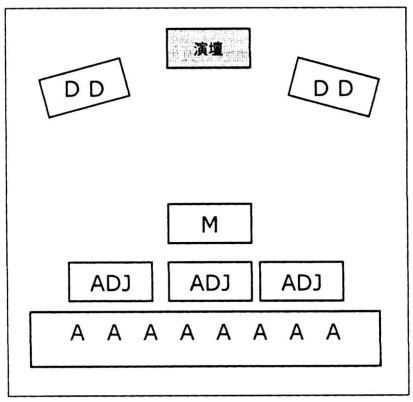
各スピーカーの名称	日本語訳	時間[4]
Prime Minister	首相	8 分
Leader of the opposition	野党側党首	8 分
Member of the Government	政府側党員	8 分
Member of the opposition	野党側党員	8 分
Leader of the opposition	野党側党首(反駁)	4 分
Prime Minister	首相(反駁)	4 分

PD はイギリス議会をモデルとするため、論題に対して肯定側は「政府側」、否定側は「野党側」と呼ばれる。北米形式の試合では 2 名で構成されたチーム二つが政府側、野党側にたち試合を行い、政府側は論題が正しいことを、野党側は論題が正しくないことを審査員（アジュディケーター：adjudicator、ジャッジ：judge)に対して説得しなければならない。PD では論題が発表されて20分から30分後に試合が始まり、一度試合が始まると各スピーカーの間に準備時間や質疑の時間が挟まれないため、いかに試合の前に様々な知識をつけておくか、試合中では相手に対していかに即興で的確に対応するかが勝敗の要となる。肯定側・肯定側のどちらになるかも試合が始まる20分から30分前に論題とともに発表される。

二点目の特徴は、PD で使用される論題の多様性と数の多さである。PD では論題はモーション（motion)、レゾリューション（resolution)、トピック（topic）などと呼ばれ、英国議会をモデルとする PD の論題の多くは“This house…”（この議会では～）という形になっている。論題は、政策に関する政策論題、価値比較を行う価値論題、事実に関する事実論題の三種類が使われるが、政策論題では「～すべきか」、価値論題では「どちらがよいか」、事実論題では「～は事実であるか」について、それぞれ異なるアプローチから議論が行われる。議論の種類に加えて、PD では日常で賛否に意見が分かれる全ての事象が論題になり、政治・経済、国際関係、教育、文化、宗教、スポーツなどから恋愛やユーモアに関するものなど枚挙に暇がないが、大会ではその時期によく議論が行われているもの、すなわち時事問題が頻繁に出題される。特に PD は国際大会を活動の基礎としているため、時事問題の中でも国際的な問題を扱う論題が出されることが多い[5]。このように、どのようなテーマがどの種類の議論として出されるかは試合が始まる20分から30分前になるまでディベーターには知らされず、PDでは試合ごとに論題が変わるため、参加者にとっては日常的に幅広く様々な知識をつけることが大きな課題となる。

三点目は、PD 独自のルールであるポイント・オブ・インフォーメーション（Point of Information: POI）である。先に述べたように PD では各スピーチの間に質疑の時間が設けられていないため、ディベーターは反対側のスピーカーが話している最中に「ポイント・オブ・インフォーメーション」と言ってスピーチに介入し、質問することができる。POI はスピーチの最初と最後の一分間は禁止されている。ただし、POI をとるかどうかはスピーチを行っている人の判断に任されるためスピーカーは断ることもできるが、通常は 1 つのスピーチの中で数回 POI をとる、あるいは POI を行うことが推奨される。これは、PD の試合では準備時間が挟まれず交互に演説が進むため、POI で互いにコミュニケーションをとらなければ議論が深まらないためである。同時に聴衆や審査員とスピーカーとのコミュニケーションに重点をおく PD では、POI はただの質疑ではなく聴衆や審査員へのアピールに使われることも多く、エンターテイメント性を強く含んでいる。POI はスピーチ中に突然行われるため、質問に対してどのように効果的に対応するか、機知が試される場面でもある。このような意味でも POI は「戦略」であり、PD を活きた討論にする重要な要素の一つだと言える。POI は立論中に相手に質問を行うためのものであるが、同様に相手のスピーチ中に介入してアピールするものに、試合中に相手の反則を審査員にアピールするポイント・オブ・オーダー（Point of Order: POO）や相手に名誉を傷つけられた場合のポイント・オブ・プリビレッジ（Point of Privilege: POP）がある。た

図 1　試合会場の配置



注）D：ディベーター、M：司会、タイムキーパー、
ADJ：審査員[6]、A：聴衆

3　ICU Debating Society, 1999, p. 111. 日本語訳は著者が作成した。
4　制限時間は立論が 7 分や反駁が 5 分など、大会によって若干の違いがある。
5　論題については、附録 2 を参照。
6　審査員の数は大会や試合によって異なるが、一般的に大会の予選では 1 人～3 人の審査員が評価を行う。

だし、一般的にはPOPはほとんど使われず、POOは反駁で相手が新しい議論を出した際にルール違反を審査員に伝えるために使われることが多い。試合会場の配置は図1のとおりである。

四点目の特徴は、PDの議論では文献などの証拠資料を用いないことである。多くのディベート形式では議論を裏付けるために証拠資料を引用し、判定においても証拠資料が適切であったかが問われるが、PDでは証拠資料ではなく具体例を出すことなどによって、いかに議論のプロセスを説明ができたかが重要視される。そのため、PDで行われるスピーチは審査員や聴衆への語りかけであり、日常の会話に近い性質を持つ。したがって、より説得力をもったスピーチを行うためには議論の内容だけでなく、声の抑揚や強弱、ジェスチャーを駆使するなど「伝える技術」も同様に必要になるため、PDはパブリック・スピーキングの要素が強いディベート形式だとも言える。実際に多くの国際大会ではPDの通常の試合に加えて、パブリック・スピーキングのコンテストが平行して行われる。これはスピーチの直前にあるトピックが与えられ、それについて数分間一人でスピーチを行うものであるが、大会だけではなく普段のPDの練習にパブリック・スピーキングを取り入れて練習を行うケースも多い。この点について、ディベート・ツアーでアメリカからイギリスに渡ったBaird(1923)は、イギリスの形式には「パブリック・スピーチの優雅さ」があるとし、イギリスチームが聴衆とのコミュニケーションをとる様子を以下のように報告している。

> The Oxonian takes time on the platform to reflect, to cultivate delightful informality and even intimacy with his auditors. (pp. 221-222)

最後に、PDの様々な規約が謳っているように、PDはディベートと共に国際的な交流を盛んに行っていることも特筆に価するだろう。毎年、世界各地で開催される大会では、互いに文化を紹介するイベントなどが行われる他、ツアーや合宿など各国／地域ごとに独自の活動も行われている。このような機会にある論題について異文化の学生と討論し、その他様々な交流をもつことがPDの魅力になっていると考えられる。

以上、四つの観点からPDの特徴を述べたが、さらに他形式と比較するためにPDとNDT形式との主な相違点を表2にまとめた。まず初めに、ディベートのモデルについてはPDがイギリス議会をモデルとするのに対し、NDTは法廷とされている。論題の種類はPDが政策論題、価値論題、事実論題を、NDTは政策論題を扱う。ただし、NDTについては歴史的にはモデルは法廷にあるが（Stock issues paradigm)、その後議会モデル（Policy-making paradigm）が中心となるなど様々なパラダイムが存在する。PDでは論題は試合毎に異なり、試合の20分から30分前に発表されるのに対して、NDTでは半年ごとに異なる論題が発表される。議論の証拠資料については、PDでは証拠

表 2　日本における PD 形式の特徴と NDT 形式との主な相違点[7]

主な相違点	PD	NDT
モデル	英国議会	法廷
論題の種類	政策論題・価値論題・事実論題	政策論題
論題	試合ごとに異なる	半年ごとに異なる
論題発表	試合開始の20〜30分前に発表	半年に一度発表
証拠資料	引用しない	出典を明示し引用する
準備時間	なし	各チーム10分の持ち時間制
質疑応答	独立した時間枠なし。質問がある場合はPOIで相手のスピーチに介入する。	立論の後にそれぞれ4分
議論の主な評価基準[8]	スピーチの説得性	証拠資料の適切さ 論理の綿密さ
国際大会	主なものに、アジア大会、アジア・オーストラリア大会、ヨーロッパ大会、アフリカ大会、世界大会がある。	大会はないが、毎年日米交換ディベートなどの交流が行われている。

7　NDT形式は日本のNDT形式のディベート推進団体の一つであるNAFA（Natioral Association of Forensics and Argumentation；全日本英語討論会）の現行大会規則を参考にした（http://www.t3.rim.or.jp/~nafa/)。

8　審査員が議論を評価する際に主に基準とする点。ただし、勝敗のレベルでは双方ともに「論題を採択すべきであるか」や、各スピーカーの責任を果たしているかなど多くの要素が関わっている。

資料を使わないが、NDT では証拠資料の出典を明示し、用いる。PD では準備時間はなく、質疑もスピーチの途中に POI を使って行うが、NDT では準備時間が各チームに10分与えられ、質疑応答も立論の後に各 4 分間、独立した時間が設けられる。このような特徴から、議論の主な評価基準は PD が議論の説得性であるのに対し、NDT では証拠資料の適切さや論理の綿密さが様々な要素の中で特に重視されるが、これは特に想定する聴衆が PD では平均的な知識をもった一般の聴衆であるのに対して、NDT はその論題の専門家という違いから生まれるものとも考えられる。活動の形態として PD では多くの国際大会に加えて国際的なイベントを行うなど、国際性を重視しているのに対し、NDT は PD ほど国際性を強調しておらず国際大会は行われていないが、日本とアメリカの間で交歓ディベート・ツアーが伝統的に開催されている。このように PD と NDT の比較を行うと、NDT の特徴がいかに時間をかけてリサーチし、証拠資料を用いて論理的に完成度の高い議論を行うか、という点にあるのに対し、PD はいかに即興で様々な論題に対して柔軟に対応できる知識や演説の能力を身に付けるか、というまったく種類の異なる二つの形式の特徴が明らかになる。実際に PD と他の形式の相違点について、これらのディベート経験のある学生に Sheckels & Warfield (1990) がインタビューを行った結果、以下のようにアメリカのディベーターも先の述べた両者の違いと同様の回答が出された。また、日本の学生からも同じ内容の回答が得られたことから、これらの特徴の違いは国・地域を問わず認識されているものと考えられる。

The best thing about APDA is that it allows me to hone my speaking skills and most approximates the type of speaking (and delivery) I will need later in life.

"On-topic" debate is much too time consuming in terms of research and puts very little emphasis on effective delivery.

On topic is mostly about how well you can go to the library. Off topic is about being creative and thinking on your feet. It's more fun. (p. 93) [9]

3．PD の教育的意義

第 2 章で PD の形式的な特徴をまとめ、NDT との相違点を明らかにした結果、PD では特に「即興で様々な論題に対しても柔軟に対応できる知識や演説の能力を身に付ける能力」が問われることがわかった。先に述べたように形式が変わればその教育的意義も異なると考えられるが、これらの特徴から PD にはどのような効果が期待できるのか、第 3 章では PD がもつ教育的意義について考察を行う。

PD の教育の目的として Sheckels & Warfield (1990) は「議論力」「パブリック・スピーキング力」「演説技術」「即興で考える力」「試合のための旅行による経験」「学生との交流」「学習の責任」の七点を挙げた。初めにこの七点に即して、PD の価値について説明を試みる。「議論力」はディベートを行う上で必要不可欠であるが、議論を行いながらデリバリーなどを含むパブリック・スピーキングの技術を学習できるのは PD 唯一の利点だろう。聴衆や審査員とコミュニケーションをとることで、レトリックや声、身体を使った説得方法である「演説技術」も習得できると考えられる。これは元々 PD が議会での弁論から始まっていることを考えると当然の特徴だとも言える。次に、PD は限られた時間で相手のメモをとり、反駁を考え、自分のスピー

表 3　各ステージにおける PD の教育的意義

ステージと説明		教育的意義
リ サ ー チ	様々な時事問題に関する知識を得る	視野の広がり
試　　合	限られた準備時間・質疑応答 反対の立場に立つ 立論・反駁を行う 演説形式のスピーチ	即興性 多角的な視点 深い考察、洞察力 聴衆とのコミュニケーション・英語力
試 合 結 果	勝利 敗北	動機付け：名誉、自信 動機付け：敗北感、プレッシャー
交　　流	文化交流	動機付け：関心の高まり

9　"On-topic"とはシーズン中の論題が固定している NDT や CEDA の形式、"Off-topic"とは試合毎に論題が変わる PD やトーナメント以外のパブリック・ディベートを指している。

チの構成を練り、パートナーと相談し、質問を行うなど様々なことを同時に行わなければならないため、「即興性」は即戦的な能力として最も重要である。試合遠征を通じてこのような体験をすることによって国際的な意識が芽生え、異文化で生活する同年代の学生と交流をもち、社会的な交流を深めることもできる。そして一般的にPDは学生が中心となって活動が行われているケースが多いため、自分で学習を行うという責任感と運営力を身につけることもできる。このようにSheckels & Warfieldがまとめた七点の目的はPDの特徴をよく表していると言えるだろう。

さらに、より本質的なPDの価値としてTrapp（1996）は、「PDは“Reasoned and informed public debating”である」（p.85）と表し、以下の三点を挙げた。

> The construction of ones own arguments and the refutation of opposing ones. Breadth and depth of knowledge aimed at universal audience (pp.85-87)

Trappによると、「理由付けられた」（reasoned）とは、ディベートで自分の議論を組み立て、相手の議論を反駁するためには主張に根拠が伴うこと、「情報に基づく」（informed）とはPDの形式や論題の特徴から広く深い知識をもって議論を行わなければならないこと、そして「パブリック・ディベート」[10]は世界共通の聴衆を目的としたディベートとであると簡潔にまとめている。つまり、知識によって根拠と情報という議論の内容の基礎が形成され、ディベーター個人の資質によって世界共通の聴衆とのコミュニケーションが可能になるのである。Trappの視点から考えると、このような技術は公の場でスピーチを行う際に必要なオーディエンス・アナリシスが意図するものと同様に、相手とコミュニケーションし説得を行うためには最も大切な技術である。また、ディベートだけでなく日常生活においても、どのような人に対しても根拠と情報をもってコミュニケーションができる能力を習得する機会を、PDは提供していると結論付けることもできるだろう。実際にディベーターがPDを通じてこのような能力を培っているかどうかについては検討の余地があるが、少なくともこのような技術を練習する場になっていることは確かである。上記に挙げたPDの目的や特徴はSheckels（1990）がAPDAで行った調査でも、PDの利点としてパブリック・スピーキングの技術が一位になっており、次に議論力、友人、即興性、演説技術となるなど同様の結果が出ている。

以上、PDの教育的価値を先行研究が提示し視点を用いてPDの教育的意義について説明を行ったが、それではこれらの価値が活動のどの場面において得られるか、PDの活動のステージを、試合を中心に「リサーチ」「試合中」「試合結果」「交流」の四つに分類し、PDの特徴を基にそれぞれのステージの段階で得られると考えられる効果を表3にまとめた。初めに、ディベーターは試合の前に準備としてリサーチを行うが、その際に先に述べたようなあらゆる時事問題に関する知識や情報を得ることによって視野の広がりが期待できる。そして試合中では、自分の主張と反対の立場に立つことで、リサーチで得た知識をもとにより多角的な視点が養われるだろう。特にPDでは試合開始の20－30分前までどちらの立場になるかわからないため、この段階でも即興的な対応力・適応力が問われる。立論や反駁を交わすためには深い考察や洞察力が必要であり、試合を通じてリサーチで得た知識を運用する能力が試される。演説形式のスピーチでは、万人に向けた説得方法を学習すると同時に、それを英語で行うに十分な英語力を身に付けることができる。次に、試合が終わった後に発表される勝敗が、次のサイクルを生みだすきっかけとなる動機付けとして働く。試合に勝った場合は名誉や自信が、また負けた場合は敗北感やプレッシャーが原動力となると言えるだろう。このようにディベートはゲーム的要素を含むため、スポーツと同様に競技のおもしろさに魅力を感じる人も多い。そして試合が終わった後は、様々な交流がさらなる動機付けとなる。国際大会や異文化間のディベートに限らず、ディベートをふりかえって互いに意見を交わすことで意見の相違に気付いたり、その相手が審査員である場合もどのような点が受け入れられなかったかということを確認することで次のリサーチにつながる動機付けになる。このようにPDの活動は各ステージから構成される一連の構造をもち、試合を行うたびにこの流れを繰り返していると言える。

4．まとめと今後の課題

本論では、これまで十分に研究されていなかったPDをテーマとして扱い、PDの特徴については構造的枠組みの相違点としてPDの形式的特徴と活動の特質、教育的意義の観点から考察した。PDの特徴を各段階に分類し、それぞれがもつ教育的意義を詳細に述べた研究は他に例がないことから、本研究は新たなPDの可能性を提案した。この作業によって、ディベートの研究分野の新たな可能性を提案することができたと言えよう。

同時に、本研究を通じていくつかの課題も発見された。本論はPDの特徴からPDがもつ教育的な意義について理論的に考察を行ったが、この研究は今回の結果を基礎に

10　パブリック・ディベートについては様々な定義付けがされているが、ここではより広い意味で「様々な聴衆（パブリック）に向けたディベート」と解釈を行う。

PDの教育的効果を調べることによってさらに意味のあるものになる。従って、長期的なスパンで、PD活動への参加がどのような効果をもたらすか、実験的な調査を行う必要がある。さらに、具体的な教育プログラムを作成し、導入を試みる研究も本稿から得られた新たな方向性であり、PDの効果を詳細に解明する今後の研究が望まれる。

参考文献

Baird, A. C. (1923). Shall American universities adopt the British system of debating? *Quarterly Journal of Speech*, 9, 215-222.

Flynn, C. (n.d.). *History of the world university debating championships*. Retrieved on December 31, 2003, from http: //www.debating.net/Flynn/worhist.html.

Galizio, L. A., & Knapp, T. G. (1998). *Elements of parliamentary debate: a guide to public argument*. NY: Longman.

Hollis, C. (1965). *The Oxford Union*. London: Evans.

ICU Debating Society. (1999). *Essence of parliamentary debate (3rd ed.)*. Tokyo: ICU Debating Society.

Inoue, N. (1984). British national debate tournament. *Forensic Journal 6*(4). 31-40.

Meany, J., & Schuster, K. (2002). *Art, argument, and advocacy: Mastering parliamentary debate*. New York: International Debate Education Association.

Meany, J., & Schuster, K. (2003). *On that point: an introduction to parliamentary debate*. New York: International Debate Education Association.

Sheckels, Jr., T. F., & Warfield, A. C. (1990). Parliamentary Debate: A description and a justification. *Argumentation and Advocacy: The Journal of the American Forensic Association*, *27*, 86-96.

Tindell, J. H. (1998). Argumentation and debate textbooks: And overview of content and focus. *Argumentation and Advocacy: The Journal of the American Forensic Association*, *35*, 185-195.

Trapp, R. (1996). Parliamentary debate as public debate. *Argumentation and Advocacy: The Journal of the American Forensic Association*, *33*, 85-87.

Williams, D. E., McGee, B. R., & Worth, D. S. (2001). University student perceptions of the efficacy of debate participation: An empirical investigation. *Argumentation and Advocacy: The Journal of the American Forensic Association*, *37*, 198-209.

Ziegelmueller, G. W., & Kay, J. (1997). *Argumentation: Inquiry and advocacy* (3rd ed.). Boston: Allyn and Bacon.

中野美香 (2005a)「ディベートの功罪—パーラメンタリー・ディベートに参加する大学生の意識」『スピーチ・コミュニケーション研究』(印刷中).

中野美香 (2005b)「アジアのパーラメンタリー・ディベート—日本人学生が抱える諸問題」『日本コミュニケーション学会35周年創立記念論文集』(印刷中).

ピーター・ミルワード(1983)『あなたの英語を雄弁にするディベートのすすめ』英友社.

附録

1. PDの形式[11]

1.1 英国／ワールド形式

各スピーカーの名称	日本語訳	時間
Prime Minister Constructive	首相立論	7分
Leader of the Opposition Constructive	野党側党首立論	7分
Deputy Prime Minister Constructive	副首相立論	7分
Deputy Leader of the Opposition Constructive	野党側副党首立論	7分
Member of the Government Constructive	政府側党員立論	7分
Member of the Opposition Constructive	野党側党員立論	7分
Opposition Whip	野党側院内幹事	4分
Government Whip	政府側院内幹事	4分

1.2 オーストラリア・アジア形式

各スピーカーの名称	日本語訳	時間
1st Affirmative Constructive	肯定側第一立論	7分
1st Negative Constructive	否定側第一立論	7分
2nd Affirmative Constructive	肯定側第二立論	7分
2nd Negative Constructive	否定側第二立論	7分
3rd Affirmative Constructive	肯定側第三立論	7分
3rd Negative Constructive	否定側第三立論	7分
Affirmative Reply Speech	肯定側回答演説	4分
Negative Reply Speech	否定側回答演説	4分

2. 論題[12]

Preliminary:

1. This House would compel HIV infected people to disclose their disease to their sexual partners.
2. This house believes the EU should open its doors to North Africa.
3. This House would not teach vocational studies at University.
4. This House would positively discriminate women in the armed forces.
5. This House believes that outsourcing is good for the developed and developing nations.
6. This house would have harsher sentences for celebrity criminals.
7. This house believes that anti-terrorism is the new McCarthyism.
8. This house would expand NAFTA into South America.
9. This house would prioritise organ donations to those who have lived a healthy lifestyle.

Octo-final: This house believes it is time for an ASEAN parliament.

Quarter-final: This House Believes That Mentally Handicapped People Are Better Cared For In The Community Than In Institutions.

Semi-final: THW Use Gambling To Rejuvenate Depressed Economic Zones.

Final: This House supports corporal punishment in schools.

11 ICU Debating Society (1999) より引用し、日本語訳は筆者が作成した。

12 マレーシアで開催された2005年世界大会の論題 (Flynn, n.d.)。